

## そもそも視覚の研究はなぜ必要？

北岡 明佳

立命館大学 総合心理学部

私は錯視を研究しています。錯視とは、視覚の錯覚のことです。対象のみかけとその客観的性質が一致しない現象です。錯視の研究をやるには、視覚のことをよく知っている必要があります。芸術的センスで錯視の造形物がある程度作れるのかもしれませんが、限界はあるでしょう。錯視の研究を進めるために、視覚の研究は必要です。

このように申しますと、「それでは、錯視の研究はなぜ必要？」と聞かれそうです。なぜですかね。最初にそう聞かれれば、「錯視の研究は視覚の研究に大いに貢献できると思うから必要」と答えそうです。すなわち、「視覚の研究は錯視の研究のために必要」で「錯視の研究は視覚の研究のために必要」です。私はどちらも本気でそう思っています。しかし、ニワトリが先か、玉子が先か、視覚と錯視はどちらがニワトリでどちらが玉子なのかと考え出すと、夜も寝られません。

錯視は見ておもしろいものです。しかし、視覚の科学の一分野としての錯視としては、「見ておもしろい」という点は重要ではありません。一方、「見ておもしろい」という性質は、錯視という概念の必要条件と思います。視覚の錯覚に相当するが特におもしろくない現象については、あまり錯視とは言われなと思います。ヒトが見る錯視と同様な視覚の歪みが他の動物種にもあるらしいという報告がいくつもあります。しかし、他の動物はそういう視覚をおもしろがっているようには見えません。錯視をおもしろがるのはヒトだけなのかもしれません。ヒトは二足歩行して道具を使い、言語を操り、高度に知識を集積し、そして錯視をおもしろがるわけです。ヒトが自分たちのことを深く

知ろうとするなら、錯視のこともよく知っておきたいところです。そのためには、やっぱり視覚の研究が必要なのです。

錯視は見てぱっとわかるものです。近頃では、そういう性質は「知覚的流暢性が高い」とポジティブに表現してもらえるかもしれませんが、とは言いましても、見てぱっとわかるものなので、なんとなく学問的には錯視は軽く見えてしまうこともあるかもしれません（某テレビ局からそういう扱いを受けたばかりなので、私怨入り）。それはそれで仕方ないとして、錯視の研究の基礎は視覚の研究にあります。視覚を勉強していない人に錯視はなかなか扱えません。19世紀に考案された錯視図形を額に入れて飾っておくだけでしたら視覚の研究は不要かもしれませんが、錯視の研究を発展させるためには視覚の研究をおろそかにできません。

このように書いてくると、「視覚の研究はなぜ必要？」という問いかけに対する私の忌憚ない答えは、「(自分が研究している) 錯視の研究の発展に都合がよいから」ということになります。しかし、これでは、「そもそも視覚の研究はなぜ必要？」という抽象的で高邁な問いかけに対して、我田引水的なはぐらかし応答をしている悪い印象を与えてしまうかもしれません。そこで、比較のために、これまでの日本視覚学会の歴代会長が、この問いかけにどう答えてきたかを見てみたいと思います。

掲載の古い順に見ていきますと、岡嶋<sup>1)</sup>は「視覚のメカニズムや特性を明らかにし、それを定量化・定式化して社会における様々な技術に応用するため」、西田<sup>2)</sup>は「映像技術の革新のため」と社会への還元を挙げています。塩入<sup>3)</sup>は「人類の幸福のため」とした上で、世

界をよりよく理解するためにメタマーの概念の拡張が役に立つという考え方を披露しています。佐藤<sup>4)</sup>は「僕自身の好奇心を満たすため」とした上で、「心とは何か？」という心理学の問いかけの文脈を通じて視覚を論じています。内川<sup>5)</sup>は、「物事の真理を明らかにするため」に研究してきたが、「視覚研究はこれこれの役立つ物を生み出すのに必要だと言えなければやってはいけない、というような後ろめたい気持ちを持っていなかった訳ではありません」と吐露しつつも、研究は興味だけで（好奇心だけで）続けてもよいのではないか、という趣旨で締めくくっています。

一通りこのシリーズを読んでみて、歴代会長もこのお題にはてこずったんだなあということがわかり、心が軽くなりました。さて、結論です。そもそも視覚の研究はなぜ必要か？と言いますと、「興味だけで（好奇心だけで）研究を続けることが、将来において、想定されなかった形で社会の役に立つことにつながり、人類の幸福の増進に貢献するから」と私は考えます。若者ことばで言えば、ワンチャン役に立つ<sup>6)</sup>から。

## 文 献

- 1) 岡嶋克典：視覚にまつわるFAQ〈No.8〉質問：そもそも視覚の研究はなぜ必要なのでしょう？ 答え：視覚のメカニズムや特性を明らかにし、それを定量化・定式化して社会における様々な技術に応用するため。VISION, 33, 10–11, 2021. [https://doi.org/10.24636/vision.33.1\\_10](https://doi.org/10.24636/vision.33.1_10)
- 2) 西田真也：視覚にまつわるFAQ〈No.9〉そもそも視覚の研究はなぜ必要か。VISION, 33, 81–82, 2021. [https://doi.org/10.24636/vision.33.2\\_81](https://doi.org/10.24636/vision.33.2_81)
- 3) 塩入 論：視覚にまつわるFAQ〈No.10〉そもそも視覚の研究はなぜ必要？ VISION, 33, 152–154, 2021. [https://doi.org/10.24636/vision.33.3\\_152](https://doi.org/10.24636/vision.33.3_152)
- 4) 佐藤隆夫：視覚にまつわるFAQ〈No.12〉そもそも視覚の研究はなぜ必要か？ VISION, 33, 179–181, 2021. [https://doi.org/10.24636/vision.33.4\\_179](https://doi.org/10.24636/vision.33.4_179)
- 5) 内川恵二：視覚にまつわるFAQ〈No.13〉そもそも視覚の研究はなぜ必要なのでしょう？ VISION, 34, 15–16, 2021. [https://doi.org/10.24636/vision.34.1\\_15](https://doi.org/10.24636/vision.34.1_15)
- 6) 犬が役に立つという意味ではありませんよ。ワンチャンはpossiblyという意味らしいです。麻雀用語のワンチャンスはネガティブな低確率の可能性を指しますが、若者ことばのワンチャンはポジティブな可能性を指すようです。「サイエンスは何の役に立つのか？」の答えとして最適かもしれない「ワンチャン役に立つ」、このVISION誌から普及させたいものです。